

「第45年会」・「膜シンポジウム2023」合同大会報告

第45年会実行委員長 伊藤大知
膜シンポジウム2023実行委員長 高羽洋充

今年度は、「日本膜学会第45年会」と「膜シンポジウム2023」の合同大会を、2023年11月20日（月）～22日（水）に早稲田大学リサーチイノベーションセンター（121号館）において開催いたしました。ICOM2023が2023年7月9～14日に開催されたために、通常初夏に行われている年會を秋に移動し、膜シンポジウムの時期に合同大会という形での膜学会史上での初めての実施になりました。また今年度は、日本膜学会の大会が1回のみとなったために、多数の発表者や参加者が期待されたために、会期は3日間としました。参加者は、一般会員114名、学生会員90名、一般参加者21名の合計225名に加え、法人登録会員2企業の参加をいただき、過去の膜シンポジウム2015年（神戸開催）220名と比較しても、最大の参加者数となりました。パンデミックを乗り越えて、学会が発展しているとともに、初めてご参加くださった方々もおられました。様々な分野で膜学の重要性がますます認識されていることを感じました。参加費を若干値上げさせて頂いたにも関わらず、多くのご参加を頂きましたこと、ご発表、ご参加いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

合同大会としての開催は初めてであったために、年會と膜シンポジウムの正副実行委員長が合わせて4名という体制で臨みました。また実行委員会には若手の先生方に多く加わって頂きました。実行委員の中で、会の運営方法から議論しながら、プログラムを考えました。結果として、合同大会では、年會形式の口頭発表と、膜シンポジウム形式の口頭発表の両方を受け付けて、年會形式は2トラックで、膜シンポジウム形式は1トラックでプログラムを組み、年會および膜シンポジウムの特徴が両方入ったプログラムとなるように努めました。新型コロナウイルスも沈静化したために、完全なオンサイトとし、また懇親會やポスター発表もコロナ前と同様に実施されました。

特別講演として、「生体膜インスパイアード科学とナノ医療応用」のご講演を、京都大学の秋吉一成先生から、

「細胞膜トランスポーターによる尿酸・ビタミンCの体内動態制御」東京大学医学部附属病院の高田龍平先生から、ご講演をいただきました。また人工膜シンポジウム1「膜による水処理技術を展望するXIV～低環境負荷を目指すNF膜技術～」、人工膜シンポジウム2「フロントランナーによるCO₂分離回収の現状と将来展望」、境界領域シンポジウム「生体膜・境界膜の解析技術の最前線」、生体膜シンポジウム「生体膜における生命現象の理解を目指して～分子から個体レベルまで～」が開催されて、多くの先生方からご講演を頂いて、活発な議論がなされました。

早稲田大学リサーチイノベーションセンター（121号館）で完全オンサイトは初めてでしたが、会場を確保して下さった早稲田大学の松方先生、酒井先生、および松方研究室のスタッフ・学生の方々のご尽力で、当日もスムーズに進行しました。事前の準備から、前日の設営、当日の運営まで、膜学会事務局の渡部様のご尽力を頂きました。厚く感謝申し上げます。

日本膜学会会長：山口猛央（東京工業大学）

第45年会実行委員長：伊藤大知（東京大学）、副委員長 谷口育夫（京都工芸繊維大学）

膜シンポジウム2023実行委員長：高羽洋充（工学院大学）、副委員長 森田真也（滋賀医科大学）

実行委員：赤松憲樹（工学院大学）、稲垣奈都子（東京大学）、太田誠一（東京大学）、奥山浩人（東京工業大学）、兼橋真二（東京農工大学）、神尾英治（神戸大学）、川勝孝博（栗田工業）、佐伯大輔（信州大学）、酒井 求（早稲田大学）、杉本悠（山口大学）、谷口雅英（東レ）、長尾耕治郎（京都薬科大学）、南雲 亮（名古屋工業大学）、宮川雅矢（工学院大学）、山登正文（東京都立大学）、渡部恭吉（日本膜学会）



講演会場の様子（A会場）



特別講演 秋吉先生



特別講演 高田先生